

埋文にいがた

MAIBUN

新潟県埋蔵文化財センター

MAIBUN
NIIGATA

2022 Nov.

第119号

発掘調査
整理遺跡
紹介

丘江遺跡・六日町藤塚遺跡・ササラ西遺跡
歴史の道 県内の遺跡 本ノ木遺跡・田沢遺跡群



南魚沼市 六日町藤塚遺跡（令和4年10月）
土器集積遺構の調査



2022年度
発掘調査
遺跡の紹介

丘江遺跡Ⅵ 中世の集落と弥生時代の流路

所在地：柏崎市田塚・茨目

丘江遺跡は鯖石川左岸の沖積微高地^{ちゅうせきびこうち}に立地し、標高は6～7mです。国道8号柏崎バイパスの予定地内の約750mにわたり遺跡が広がることが分かり、平成26（2014）年度から発掘調査を続けています。

本年度は5か所の調査区を対象に調査を行っています。北側の調査区①～③では、上層・中層・下層で中世から近世にかけての水田^{けいはん}・畦畔（あぜ）、下層で確認した中世の水田の下に弥生時代以降の流路を検出しました。流路の堆積はこれまでの調査結果から上・中・下層部に大別でき、上層部が中世、中層部が古墳時代、下層部が弥生時代であることがわかっています。調査区①の東西流路の最下層部分は、横断面が逆台形を呈すとともに人為的に掘り返したときに見られる堆積状況を示すことから、その部分は人工的に掘られたものと考えています。この部分で多数の流木と一緒に、弥生時代後期の土器やごく少数の加工痕のあ

る木材が出土しました。この木材は南北流路と東西流路の合流点の底面に刺さるような状態で出土しました。

南側の調査区④・⑤は中世から近世の居住域で東西流路・南北流路とピット、井戸を検出しました。調査区④では東西流路と南北流路の合流部分を確認しましたが、その堆積状況から、最終段階では東西流路のみが存在していたと考えられます。また、その埋没途中で井戸が1基設けられていることも確認できました。調査区⑤で確認した東西方向の溝2条は、流路によって区画された居住域を細分する役割をもっていたものと考えられます。この溝周辺にはピットが分布しますが、隣接する調査区で確認したピットの密度からみるとまばらでした。調査区④・⑤の居住域からは中世の珠洲焼^{すずやき}の播鉢^{すりばち}（片口鉢）^{せいじわん}・青磁碗^{すがわら}、近世の菅原道真像^{みちざねぞう}などが出土しています。

（株式会社島田組 安孫子雅史）



調査区③ 南北流路と東西流路（西から）



調査区① 東西流路 土層堆積状況（西から）



弥生土器 器台



珠洲焼 播鉢（片口鉢）



土製品 菅原道真像



2022年度
発掘調査
遺跡の紹介

むい か まちふじづか

六日町藤塚遺跡V・VI

古墳時代後期の土器祭祀と飛鳥から奈良時代の集落

所在地：南魚沼市余川

六日町藤塚遺跡は南魚沼市に所在する遺跡です。庄之又川によって形成された扇状地に立地しており、標高は約180mを測ります。

発掘調査は国道17号六日町バイパスと国道253号八箇峠道路の建設に伴い実施しています。平成29（2017）年から令和元（2019）年まで実施した調査では、古墳時代中期から後期にかけての集落と祭祀場が見つっています。

今年度の調査では古墳時代、古代、中世の3時期の遺構を確認しました。

遺構は、古墳時代後期の調査面から臼玉を伴う土器集積が見つっています。土器は高杯、甕などが出土しており、臼玉は現時点で2点見つかりました。この土器集積が過去の調査でも確認されている祭祀場の広がりを示すものか、今後検討を行っていきます。

7世紀後葉から8世紀初頭（飛鳥～奈良時代）の生活面から掘立柱建物、土坑、耕作溝を確認し

ています。掘立柱建物は少なくとも4棟の建物が並ぶと考えられます。集落は掘立柱建物のみで形成され、いずれも東西に軸を揃えています。建物群の南辺で見つかった土坑から須恵器の杯・杯蓋、土師器の甕など多くの遺物が出土しました。掘立柱建物の周辺で複数の耕作溝を確認していますが、掘立柱建物の柱穴が耕作溝の上から掘られているため、耕作域が居住域に転換されていく時期があったと推察されます。

遺物は、古墳時代では白玉や土師器の甕・高杯、須恵器の^{はろう}腿があり、飛鳥～奈良時代では須恵器の杯・杯蓋・甕、土師器の杯・甕、鉄製品などが出土しています。

これまでの調査では古墳時代を主体とする調査成果が挙げられてきましたが、今年度の調査では飛鳥～奈良時代の遺構・遺物が多く確認でき、古墳時代に続く土地利用の在り方が確認できました。

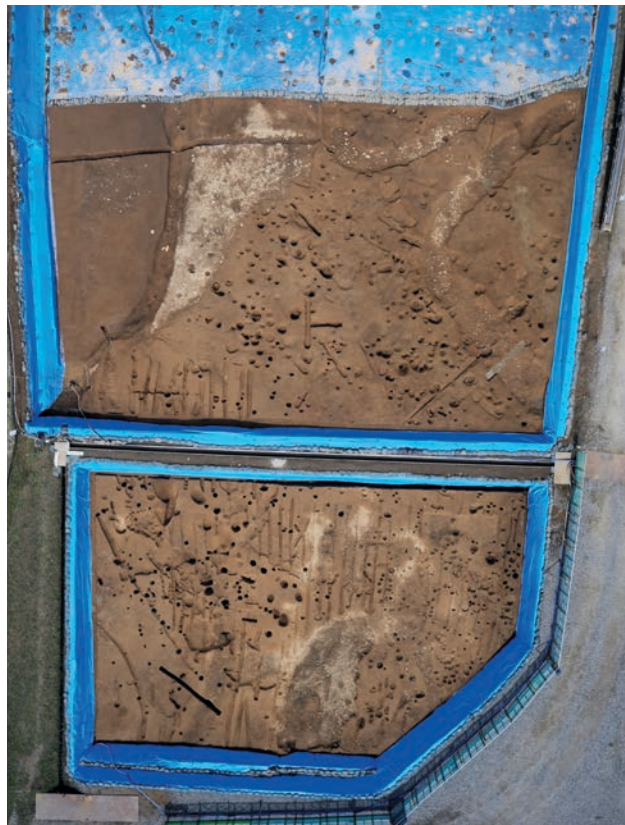
（株式会社イビソク 飯山大治郎）



調査区全景（南東から）



古墳時代後期の土器集積（南から）



飛鳥から奈良時代の遺構群（真上から）



2022年度
整理作業
から

にし ササラ西遺跡の整理状況

所在地：長岡市川口中山地内

ササラ西遺跡は長岡市川口中山にあります。一般国道17号川口待避所建設事業に伴い令和3（2021）年に発掘調査を行い、本年度は発掘調査報告書刊行に向けて整理作業を進めています。

調査では遺跡の西側に帯状に延びる低地が見つかり、その低地を人々が活用してきた歴史が明らかになってきました。遺跡からは様々な時期の遺物が出土していますが、中世（約700年前）と縄文時代後期後葉から晚期中葉（約3,000年前）の2つの時期を中心として人々の活動痕跡が見つっています。

中世においては低地の境などに多数の杭が打ち込まれており、円礫を敷き並べて畦畔が作られていました。低地には黒く湿った土が平らに堆積しており、水田として利用されたと考えられます。時間を遡ると、縄文時代のこの低地には河川が流れていて、河川跡から多数の縄文土器や石器が見つかりました。縄文時代のムラそのものは見つかりませんでしたが、この河川の脇で一時的に煮炊きをした暮らしの痕跡が確認されています。

整理作業では、出土した遺物を系統・時期別に分類しながら、遺跡の変遷を探っています。縄文土器を観察すると、様々な地域の影響を受けていることが分かります。後期後葉の段階では、この時期の県内に特徴的な大波状口縁深鉢をはじめとして、関東系や中部高地系の土器が認められます。晩期に入ると東北系の大洞B1～C2式を主体としつつも、中部高地系の佐野式が少量含まれます。

石器・石製品は地元である魚野川や破間川の周辺で入手できる石材が多く用いられていますが、土器と同じように、遠隔地からもたらされた石が含まれています。糸魚川産のヒスイ製玉類を始めとして、少量ですが周辺地域では採取できない質の良い珪質頁岩が含まれる他、黒曜石製の石器が出土しています。産地分析を行ったところ、東北地方（山形県）及び中部高地（長野県）産であることが判明しました。

以上のようにササラ西遺跡は、中部高地・関東地方と東北地方という、南北の文化の交差点に位置していたのだと考えられます。今後、作業を進めるにあたって他地域との交流についての理解を深めたいと考えています。

（株式会社大石組 竹部佑介）



縄文時代の遺物出土状況（河川脇）



縄文時代後期・晩期の土器



縄文時代の石器



埋文 コラム

土器集積遺構について

古墳時代の生活の一端を窺えるものに、土器集積遺構と呼ばれるものがあります。この遺構からは祭祀遺物が出土することも多く、出土状況や立地条件などから、単なる捨て場だけではなく、祭祀行為に関する遺構であると考えられています。

土器集積遺構祭祀の特徴として、①土器が集積された状態で発見され、その状態にはある一定の規則性をもつこと。②土器は完形であったり、故意に壊されたり、積み重なって出土するなど祭祀の形態が各遺跡により異なること。③石製模造品や手捏^{てづくね}土器、玉類などの祭祀遺物が一緒に出土する例が多いこと。④集積する場所として、集落と外との境界や集落を見渡せる場所など立地条件を選んでいること、などがあげられます。土器が集積された状態には様々なパターンがあります。土器をまとめた状態の集積型、土器を並べた配列型、土器をまき散らした散布型などがあります。土器集積遺構の状況は当時の祭祀のあり方や方法の謎を解く手掛かりとなります。

新潟県内では糸魚川市横マクリ遺跡、胎内市野付遺跡、南魚沼市六日町藤塚遺跡、同市坂之上遺跡などで土器集積遺構が見つっていますが、集積型が多くを占めています。

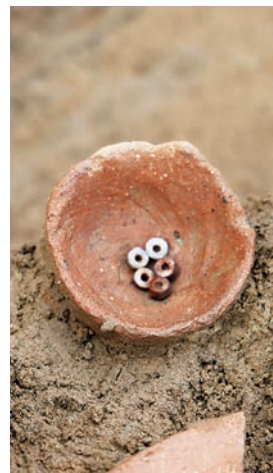
このうち2018年度調査の六日町藤塚遺跡の土器集積遺構についてご紹介します。遺跡は扇状地扇端部に位置する古墳時代と古代の複合遺跡です。

土器集積SX79は集落から10m以上離れたところにありました。石製模造品とともに多数の土器が出土しました。器種構成は、須恵器甕^{はそう}、土師器杯^{そう}・高杯・小型壺・甕・鉢・ミニチュア土器、双孔方板^{こうほうばん}、管玉、白玉、鉄製刀子です。完形土器が多数あり、土器はほぼ正位の状態で発見されました。特に注目したいのは土器を積み重ねた状態で集積したことです。土師器杯の上に小型壺を載せ、さらに小型壺の口縁部にミニチュア土器を置いたうえで、中に白玉を入れている状態が確認できました。白玉は土器の中から47点、遺構周辺の土から174点の計221点も出土しましたが、白玉が入った土器は9点だけなので、土器を選択して白玉を入れたことがわかります。また、祭祀遺物である双孔方板は石製模造品の一種で、ミニチュア土器を2つ重ねた中に入れられていました。

六日町藤塚遺跡の土器集積遺構は、多数の土器と祭祀遺物から祭祀の特色が強い遺構であることがわかります。土器の密集度が高く、選択した土器を重ねて祭祀遺物を入れて祀る出土状況から、同遺跡の土器集積遺構祭祀ではその場で祭祀を行い、終了後も据え置くことで祭祀景観の空間的保存を行いました。すなわち、祭祀終了後も土器集積という形であり続けることが集落内祭祀のあり方と信仰につながったのではないかと推測されます。(中島愛理)



六日町藤塚遺跡 土器集積遺構



双孔方板と白玉の出土状況



埋文 コラム

りよくゆうとう き 緑釉陶器

鉛と珪石（石英）を配合し、加熱して得られた鉛ガラスを主成分とする釉薬をかけた陶器を、考古学・埋蔵文化財分野では鉛釉陶器と呼んでいます。鉛ガラスそのものは透明ですが、これに少量の酸化鉄を加えることにより黄色や褐色、酸化銅（緑青）を加えることで緑色の釉薬となります。標題の「緑釉陶器」は鉛釉陶器の一種で、唐三彩や奈良三彩も鉛釉陶器に含まれます。

日本における鉛釉陶器の生産は飛鳥時代に始まり、当初国内で生産された鉛釉陶器は単色のものが大半でした。奈良時代に入ると唐三彩の影響を受け多色の鉛釉陶器（奈良三彩）が盛行しますが、平安時代になると、多色の鉛釉陶器は作られなくなり、緑色の鉛釉を器面にかけた緑釉陶器が作られるようになります。緑色の陶器の流行の背景には、唐の茶人 陸羽が著した『茶経』のなかで最も優れた喫茶用の碗とされた越州 窯青磁の影響があったとする意見があります。

鉛ガラスを主成分とする釉薬は比較的低温で熔け、高温になると発泡してしまいます。鉛釉陶器の素地に軟質のものが多く見られるのはこのためです。緑釉陶器には硬質の素地も相当数見られますが、これは素地だけを高温で焼成し、その後硬く焼き締めた素地に釉薬をかけ、適温で再度焼成したとも考えられます。

『日本後紀』卷廿四弘仁六年（815年）正月丁丑条には「瓷器生産の見習い工人である尾張国山田郡出身の三家人部乙麻呂ら3人が技術を習得し終えたので、諸々の官人見習いに準じて登用した」とする内容の記事が見られます。尾張国（愛知県西部）は瓷器＝緑釉陶器を都に貢納する国の一つで、平安京近郊で「瓷器」の生産技術を習得した三家人部乙麻呂ら3名は、尾張国に戻り緑釉陶器の生産を指導したと考えら

れます。9世紀後半以降、緑釉陶器は長門国（山口県北部）、丹波国（京都府北部）、美濃国（岐阜県南部）、三河国（愛知県中・東部）、近江国（滋賀県）などでも作られましたが、11世紀前半頃には各地で生産を終えたようです。

写真は、平成15（2003）年・平成16年に北陸新幹線建設に先立ち発掘調査が行われた、上越市板倉区米増に所在する五反田遺跡から出土した緑釉陶器皿です。

2点とも素地は硬質でやや灰色味を帯び、断面方形の輪高台がつきます。内外面は平滑に研磨され、全面に釉薬が施され、釉色は鮮やかな黄緑色で光沢がみられます。内面と底部外面には、焼成時に重ね焼きに用いるトチンの目跡が確認できます。トチンの目跡周辺には擦痕があり、目跡の除去を目的としたものと考えられます。高台先端の一部には使用による釉薬の剥落箇所がみられます。

高台やトチンの目跡の形状、調整技法などから9世紀中頃に尾張国で生産された緑釉陶器と考えられます。三家人部乙麻呂らの指導の下で生産された緑釉陶器でしょうか。

この緑釉陶器は、新潟県埋蔵文化財センターで現在開催中の企画展「謎の越後国府に迫る」（会期：12月18日（日）まで）でご覧になれます。また写真右の緑釉陶器皿は、企画展終了後は常設展示室で展示する予定です。（春日真実）



緑釉陶器皿（右が口径16.0cm）上越市板倉区五反田遺跡



埋文 コラム

歴史の道紹介

会津街道・諏訪峠（新発田から会津へ至る道）

歴史の道紹介第2回は会津街道です。

平成9年出版の『新潟県歴史の道調査報告書第十一集 会津街道・米沢街道』からご紹介します。

会津街道は江戸と佐渡を結ぶ佐渡三道のひとつで、当時は新発田城下から奥州会津若松城（現在の福島県会津若松市）に至る道と認識されました。街道の呼び名は複数あり、村上藩・新発田藩が参勤交代で利用したことにちなんだ「殿様街道」や、越後側では「会津街道」「新発田街道」、近世は会津藩領だった阿賀町津川の町場では「越後街道」と呼ばれました。交易の中心地・新潟町（湊）へ至る阿賀野川水運を利用できる拠点として、会津藩は街道の整備に力を注いだそうです。

街道では、塩や越後米などの物品だけでなく人々の往来もありました。東海道中膝栗毛の作者十返舎一九、幕末の志士吉田松陰もそのひとりです。道中の阿賀町津川に位置する諏訪峠は難所として知られ、文化11（1814）年に会津街道を旅した十返舎一九は著作『諸国道中金の草鞋』で「このとうげほどたかなんぎなるハなし、あつじぶんでもとうげはさむし」（引用②）と書いています。

さて、会津街道には様々な遺構が残っています。

その中でも、阿賀町に残る行地・柳新田・福取にある一里塚は、2基1対の完形の一里塚が3つ続いている貴重な例です。一里塚とは街道にある

旅人の目印で1里（約3.9km）ごとに置かれる塚のことです。柳新田の一里塚（写真）は高さ約4m、基底部周り33mの半球状で、塚の間に街道が通っていました。往時は塚の上に榎の木が植えられ、街道をゆく人々の目印となっていました。

もうひとつは石畳です。寛文年間（1661～73年）会津藩による街道整備の際に、諏訪峠越えの街道が石畳に改修されました。いまに至るまでに多くは失われてしまいましたが、一部の石畳は現在も形を残し、完形の一里塚とともに当時の街道の様子を今に伝えています。街道に残る一里塚や石畳は貴重な遺構として町の指定文化財となり、大切に保存されています。

最後に会津街道が盛んに利用された頃の街並みに触れた著作をご紹介します。旅行家・紀行作家のイザベラ・バード著『Unbeaten Tracks in Japan』（『日本奥地紀行』）です。1878年頃に会津街道を利用し津川に立ち寄った際、街並みについて次のように書いています。「通りに面して切り妻壁を向けており、軒下はずうっと散歩道になっている」（引用③）当時著者が見た街並みは「とんぼ（雁木）」と呼ばれるもので、今も津川市街地でみることができます。ぜひ、会津街道の宿駅と阿賀野川水運で栄えた当時の賑わいに想いを馳せながら、散策してみてください。（葭原佳純）



完形で残る柳新田の一里塚（2022年10月撮影）

【参考文献】

- ①阿賀町、新潟地域振興局発行『会津街道～いにしえから続く道～』2019年
- ②新潟県『新潟県史資料編11近世（文化編）』1983年
- ③高梨健吉訳、イザベラ・バード著『日本奥地紀行』平凡社ライブラリー329 2000年



県内の
遺跡・遺物
117

令和元年10月16日 国指定史跡

本ノ木遺跡・田沢遺跡群

遺跡所在地：津南町・十日町市

遺物保管：津南町・十日町市・國學院大學博物館・東北大学考古学研究室

信濃川^{きよつがわ}と清津川の合流点には、縄文時代草創期遺跡が多く分布しています。信濃川の左岸は、魚沼層^{うおぬま}が隆起した東頸城丘陵^{ひがしけいぎき}が広がり、右岸は信濃川と清津川による河岸段丘^{かんだんきゅう}が形成され、本遺跡群もこの段丘面にあります。また、清津川上流には遺跡で出土する石材となる頁岩層^{けつがん}が分布しています。

本ノ木遺跡は、清津川左岸の本ノ木面と呼ばれる段丘面に位置します。昭和31年に芹沢長介氏^{せりざわちやうすけ}によって、そして翌年の昭和32年に山内清男氏^{やまのうちにすけ}による発掘調査が行われました。その結果、膨大な量の尖頭器^{せんとうき}と押圧縄文土器^{おしあつじやうもん}と呼ばれる土器がわずかに出土しました。同遺跡では、この石器と土器が伴うかどうか、旧石器時代と縄文時代の狭間^{はざま}を議論する「本ノ木論争」の舞台となりました。

それから50年後の平成18（2006）年、國學院大學の藤本強氏^{つよし}、小林達雄氏によって当時の調査が再確認されました。その後も調査が継続され、津南町教育委員会による発掘調査も行われました。

その結果、水田面のA地点から尖頭器石器群が出土し、杉林内のB地点から押圧縄文土器群が出土するという傾向が確認されました。また、2m以上の土石流堆積層が発見され、その堆積物が信濃川の対岸の崩壊によって川を越えて堆積された層であることが明らかになりました。

田沢遺跡^{たざわ}と壬遺跡^{じん}は、清津川を挟んだ本ノ木遺跡の対岸にある段丘面に位置します。田沢遺跡は昭



信濃川と清津川の合流点



土石流堆積層

和43（1968）年に東北大学考古学研究室により調査が行われ、隆起線文土器や無文土器、木葉形尖頭器^{もくようけいせん}、打製片刃石斧^{とうせいせん}などが出土しました。隆起線文土器^{りゅうきせんもん}は、隆起線の幅が広い特徴的な隆帯文土器が出土しています。

壬遺跡は昭和54～61年にかけて國學院大學考古学研究室により5次にわたる調査が行われ、平成7（1995）年には中里村教育委員会



田沢遺跡・壬遺跡の近景

が送電線鉄塔移転に伴う調査を実施しました。壬下層土器^{じんかそうどき}、隆起線文土器、押圧縄文土器など数多くの土器が出土し、なかでも全国的に出土例の少ない円孔文土器^{えんこうもん}がまとまって出土したことは注目されます。

縄文土器が発明された縄文時代草創期の遺跡は全国的も少なく、これほどの遺跡群が密集して、多くの資料が出土し、それが遺跡として現存していることに価値があり国史跡に指定されました。さらに、人間の活動と災害など大地の成り立ちを理解することもできます。

本ノ木遺跡は、津南駅から車で約10分（5km）、出土遺物は津南町歴史民俗資料館（025-765-2882）に収蔵・展示しています。

田沢・壬遺跡は越後田沢駅から車で約5分（1.2km）、出土遺物は田沢遺跡が東北大学考古学研究室、壬遺跡が國學院大學博物館と十日町市博物館（025-757-5531）に収蔵・展示しています。

（津南町教育委員会 佐藤信之）
（十日町市教育委員会 笠井洋祐）



埋文にいがた 第119号

令和4年11月25日発行

発行 新潟県埋蔵文化財センター Niigata Prefecture Archaeological Research Center

指定管理者：公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1 TEL: (0250)25-3981 FAX: (0250)25-3986

E-mail: niigata@maibun.net URL: https://www.maibun.net/

